



幽霊敷の  
アイツ

A Girl  
lives in the  
Haunted  
House

川口雅幸 著

Masayuki Kawaguchi

	第一章	失われた肝 <small>うしな</small> だめし	5
	第二章	消えたポニーテール	61
	第三章	坂下 <small>さかした</small> さんの秘密 <small>ひみつ</small>	121
	第四章	裸足 <small>はだし</small> と白いハイカット	183
	第五章	古井戸 <small>ふるいど</small> の中の明日	243
エピソード			321

第一章

失<sup>うしな</sup>われた肝<sup>きも</sup>だめし

幽霊なんていないんだ。いるわけがない。

オレはSFとかは好きだけど、幽霊の存在はまったく信じないし、絶対に認めない。なぜって、そんな恐ろしいものなど、この世にいてほしくないから。

だから、ホラー映画を観たり、お化け屋敷なんかに入ったりするやつのが知れない。何でわざわざ自ら進んで怖い思いをしなきゃいけないのか、まったくの疑問だ。

「まったく、あいつらは、こういうのどこが楽しいんだよ」

鬱蒼とした林に囲まれた狭い道を、月の光だけを頼りにひたすら突き進む。

なんて蒸し暑いんだろう。時々風は吹くけど、ちっとも涼しくならない。

むしろその生ぬるい僅かな空気の動きが、腕やふくらはぎに纏わりついてきて不快なくらいだ。道路脇の石垣から迫り出した真っ黒い草木の群れが、ワサワサと内緒話のような音を立ててい

ガードレールは仄青いカーブを不気味に浮かび上がらせ、まるで闇の奥へ奥へと導いているかのよう。

「ちぎしよう、怖くない、全つつつ然怖くなんかないぞ」

毎年のことながら、宗佑が肝だめしをやるうやろう煩いから、仕方なく参加してやったけど。五年生からは一人で挑戦しなきゃいけない、なんて鬼のようなルール、いったい誰が決めたんだよ。

納得いかない上に、くじ引きの結果、よりもよつてオレがトップバッターに躍り出ちまうし。まあ、一瞬「げっ」とは思ったものの、順番は別に大した問題じゃない。

浄水場までのルートは、日が暮れる前に一応みんな確認しに行っており、公民館からだとせいぜい片道一〇分くらいのほぼ一本道。

これが初めてではないし、地元の間人じゃないオレでも、道に迷うことはまずありえない。

その浄水場の脇にある古い祠に、予め用意した自分の直筆サイン入り缶ジュース（ご丁寧に不正防止用のシールまで貼ってある）が置いてあり、取ったら折り返し帰って来る。ただそれだけのことだ。

だから、今回も超余裕だと思って高をくくっていたんだ。

それがどうだ。同じ道を通るだけなのに、一人だところんなにも心細いなんて。

昼間はあんなに平和でのどかだった田舎の風景が、こんなにも殺伐とした闇の世界に変貌してしまうだなんて――

ガサガサガサッ！

突然、背後で物音がした。

飛び上がるように振り返ると、石垣の上から闇色の何かが立て続けに落ちてくるではないか。たまらず「うわっ！」と声を上げると、それらはサササッと一目散に駆け出し、ガードレールの下をくぐり抜けていった。

「何だよ、脅かすなよもう」

たぶん、タヌキの親子か何かだろう。

この辺りにたくさんいて、時々庭に迷い込んだりもするんだって、お婆ちゃんが言っていた。

「あーやだやだやだ。頼むよマジで」

暑いのに寒いような、変なゾゾワに身震いしながら足早に歩いていくと、少し先に急な坂道が見えて来た。

ようやく往路の中間地点だ。あの曲がりくねった坂をぐんぐん上っていけば、行き止まりに

【第二浄水場】と書かれた鉄格子の門が待ち構えている。

その脇の細いけもの道に入ってすぐのところ、目指す祠はある。

苔や蔦が蔓延る古びた独特の雰囲気は、明るい時でも見るからにヤバそうなオーラを放っている。

夜ともなれば、まさに肝だめしに打って付けの場所だろうなどと、妙に感心してしまうほどだ。ただ、そこまで行き着く前にもう一箇所、身の毛もよだつ恐怖スポットがある。

坂の上り口に建っている廃屋の大きな一軒家、通称『幽霊屋敷』だ。

実は一年生だったか二年生だったかの頃、立ち入り禁止にもかかわらず、宗佑とその家の敷地で探検ごっこをしたことがあって。

探検とは言っても、すぐ大人の人の見つかつて、ものの五分くらいで引き上げたんだったかな。で、もちろんその時は、何も知らずに足を踏み入れたんだけど、

「あそこの家は呪われてて、住んでた人がみんな死んじゃったんだぜ」

という話を上級生の人に聞かされてからというもの、近付くのがさえ怖くなってしまったのだ。ほら、だからいやなんだよ幽霊とかお化けの部類って。

同じオカルト系でも、ある日突然宇宙人に会って不思議なパワーが使えるようになるだとか、異世界に行って大活躍するだとか、そういうのなら大歓迎だ。

いつか自分の身にも、マンガや映画の主人公みたいにワクワクするような不思議なことが起きたら楽しいだろうな、っていう気持ちは常にあるし。

だけど幽霊みたいに、ひとの家に勝手にとり憑いて不幸な目に遭わせたりするような、不吉で恐ろしいだけの存在となんか、絶対に関わり合いたくない。

お蔭で、ああいう人の住んでなさそうな家を見るたびに、『呪い』とか『死』とかを連想するようになってしまったんだから……。

いやなことを思い出したあと後悔していると、ふと、急に辺りの暗さが増したような気がした。見上げれば、大きな雲の塊が、みるみる月を覆い隠そうとしている。

そうこうしているうちに、一旦ガードレールが途切れ、あの幽霊屋敷の広い庭が目に入る地点に差し掛かっていた。

何だかタイミング的にすごく不吉な感じがして、ここはもう脇目も振らず、一気に走り抜けようと思ったんだ。

「あさみー、その矢先、」

「あさみー」

どこか遠くのほうから、男の人の声が小さく聞こえてきた。

思わず足を止めると、

「あさみさーん、どこにいるのー」

今度は女の人の声。

少しびっくりはしたけど、明らかに普通の大人の人の声っぽかったから逆にホッとして。

何気なく声の行方を追って、視線を動かした瞬間、

「！」

ゾクッと、背筋が凍りついた。

そこに何者かがいる。

誰もいるはずのない廃屋の庭に、人影が。

「あさみー、どこだー」

「あさみさーん」

声がさつきよりもちよつと大きく聞こえた。

すると、その人影がにわかに蠢き出した。

後退り気味に様子を窺っていると、雲の切れ間から薄明かりが射ってきて、シルエットに僅かな明暗を与えた。

白っぽいTシャツに短パン姿だろうか、髪は上のほうで一つに束ねているように見える。

小柄でほつそりしているし、オレと同じ年くらいの女の子かもしれない。

正体が分かかってきて、再び胸を撫で下ろしつつも、いったいこんなところで何をしているのだろうかという疑問が湧いてくる。

その女の子は、庭の片隅に立って俯いているようだったが、大人たちの声がまた少し大きくなったかと思うと、落ち着きなく身体を揺すり出した。

こういう時、どうするのがいいんだろう。

何となく、女の子が声の主に怯えているように思えてきて、気になる。

声を掛けるべきなのか、それとも知らんぷりでこのまま通り過ぎるほうがいいのか……。

あれこれ考えをめぐらせていると、辺りがすっかり元の明るさを取り戻した。

上級生の話を聞いて以来まともに顔を向けたことのない、荒れ果てた庭の全景が、月に照らし出され、目の前に広がる。

ふと、その瞬間、

「あっ」

オレは思い出したのだ。

宗佑と遊んだ時に、この庭の中で見たものを。

そして、ちようど今、女の子が立っているその場所に、それがあつたはずだということ。

同時に、もの凄くいやな予感が走った。

「あさみー」

「あさみさーん」

一段と近くなった声に反応するかのように、女の子はおどおどした様子で、それを覗き込んでいる。

オレは胸騒ぎが止まらなくなって、たまらず有刺鉄線を飛び越え、庭に足を踏み入れた。

恐る恐る女の子のほうに近付いていくと、微かにしゃくり上げるような息遣いが聞こえてくる。

月明かりに浮かび上がった、青白い横顔。

思いつめたように下唇を噛み、表情をこわばらせているように見える。しかも何だ、裸足じゃないか。

「まさか」という不安と、「頼むから思い違いであつてくれ」という願いとが入り交じり、心臓が悲鳴を上げていた。

やがて女の子は、一度空を仰ぐように大きく深呼吸すると、グツと口元を引き締めた。

そして同じように固く目を閉じると、あの底なし沼のように真つ黒な古井戸の縁に足を掛け

「や、やめるー！」

気が付くと、オレは駆け出していた。

「自殺なんかしちゃだめだ！」

ビクツと細い肩を震わせ、振り向きざまに見開いた真ん丸な目。

出会い頭、時間が止まったみたい瞬間も忘れ、オレは息を呑んだ。

その瞳と瞳が、一条の線で繋がった瞬間、

「うわッ！」

足元の庭石に勢いよく躓き、まるでウサギに襲いかかるトラのように宙を舞ったオレは、

「きゃ——ッ！」

思いっきり体当たりするかたちで、少女もろとも、井戸の中に転落した。



目を開けると、お父さんとお母さんの顔が、ぼんやりとそこにあつた。

「気が付いたのね、よかつた」

「大丈夫か、燈馬」

握られている右手の温もりが、お母さんのものだとかかるのに、少し時間がかかつた。

左手の甲と手首には何かがかくつついてて、動かさないほうがいいような気がした。

見慣れない天井といい、二人の様子といい、ここが病室のベッドの上であることは何となく察しがつく。

「先生の言うとおりでだつたわね。だいぶ落ち着いてきたし、もうすぐ目も覚めるでしょうって」  
「本当に、大したことなくてよかつた。もう安心だ」

喋ろうと思っただけ、うまく声が出せず口をパクパクさせていると、お母さんが、ん？ っ  
て感じで顔を寄せてきた。

「お腹すいたの？」

確かに何か食べたいとは思つたけど、最初にそう訊かれたのがちよつと意外で、静かに頭を横に揺すつた。

一度咳払いをして唾を呑み込んでから、オレは口を開いた。

「あの子は」

ちゃんと声に出せたものの、聞き返されたから、

「あのアサミとかいう子は、どうなったの？」

そう言っただけ、  
「誰のこと？」って不思議そうな顔してる。

「だから、一緒に落ちちゃった子だよ。たぶんアサミっていう名前だと思っただけ」

そしたら今度は、二人して怪訝そうに顔を見合わせてる。



するとお父さんが、フツと口元を緩めて、「さては夢でも見てたんだろう」と言った。

「何せ二日も眠ってたんだからな」

「そうね」とお母さんも微笑んでる。

「心配したわよ。うなされたまま全然起きないんだもの」

何かおかしいなと思いつつ二人の会話を聞いていると、どうやらオレが病院に居るのは風邪をこじらせたためのようだ。

四〇度くらいの熱が出て、一向に下がらなくなり、意識も朦朧とした状態だったらしい。

それで一昨日の夜中に、救急患者として担ぎ込まれたというのが。

「ちよつと待って」

どうも話が見えてこなくて、今日が何日なのかを確認したら、いよいよおかしい。

「一昨日の夜って言ったらオレ、もうとつくに家にはいないでしょ」

「ええと、どういう意味？ 病院に連れて来たのは夜中だったけど」

「いや、そうじゃなくてさ」

「ずっと眠っていたから時間の感覚がおかしいんだろう。分かるよ、お父さんも経験がある」

「だから違うってば。一昨日なら、オレは朝から出掛けるでしょ、って意味だよ」

「何言ってるの、前の日の朝にはもう調子を崩してて、明日お婆ちゃんちに行けなくなると困るからってプールの誘いも断ったでしょ。それからお母さんが付き添って、ずっと家で寝てたじゃない」

「え、何それ……。てか、お母さん、その日は早番で、朝から仕事に行ったよね？」

「行くわけないでしょ。子供が具合悪いのに、一人でお留守番させる母親がどこにいるの。けれど今回は店長に助けられたわ。お休みを代わってもらえなかったらどうしようかと思っただか  
ら」

いったいどういうことなんだろう、まったく話が噛み合わない。

でも、お母さんが嘘を言っているようにも見えない。

「ごめん、ちよつと冷静になつて考えてみる」

この記憶に間違いなんてあるはずがない、という絶対的な自信はあった。

だけど一応、何か重大な勘違いをしていないかどうか、頭の中を整理することにして、オレは一旦目を閉じた。

そして、いくら思い出してみても、一昨日の記憶が変わることはなかった。

それと同じように、お母さんの言うことにも、まるで身に覚えがない。

「やっぱりおかしいよ。そんなはずない。第一オレ、風邪なんかひいてないし」

お腹に力が入らず、長く喋るのはちよっとしんどかったんだけど、どうにも納得いなくて。

オレは目が覚めるまでのことを、憶えている限り話して聞かせた。

一昨日の朝に家を出発して、お婆ちゃんちに一人で遊びに行ったこと。その夜、宗佑たちと肝だめしをしていたこと。途中で知らない女の子を見かけ、一緒に井戸に落ちてしまったこと……。

しかし、疑う余地もなくそれは夢だよと、お父さんは言う。

確かに、お婆ちゃんちにはオレが一足先に行くはずだった。そこまではいい。

ところが前の晩、熱は下がるどころかますます上がり、オレが完全にダウンしてしまったため、急遽予定をキャンセルしたというのだ。

「あの状態じゃあ、どう頑張ったって遊びに行くのは無理だったからな」

「お婆ちゃん、すごく心配してたから、後で電話しなくちゃね」

話を聞きながら、より一層頭が混乱してきた。

井戸に落ちるどころか、肝だめしにも参加しておらず、それ以前に、家から出掛けてすらなかったなんて。

「でも、なるほどこれで納得だ」

お父さんが腕組みをして、「肝だめし中に井戸に落ちたんじゃあ、たまらんわなあ」と、梅干

しでも食べたような顔で何度も頷くと、

「あんなにうなされて。よっぽど怖い夢だったのね」

お母さんは、握っていたオレの手にもう片方の手を添え、眉尻を下げて微笑んだ。

「おかしいなあ。どう考えても、あれは現実だよ。とても夢だとは思えない」

「夢でよかったじゃないの」

「そうだぞ。本当に井戸に落ちたりしたら、現実なら大変なことになってるぞ」

二人に諭され、それはその通りだなと思っただけ。

夢にはあまりにもリアルすぎて、首を傾げずにはいられない。

だから回診に来た先生にも、お母さんの口からオレの主張を伝えてもらったのだが、

「高熱による一時的な記憶障害で、夢と現実を混同したんでしょ」

と、にこやかに軽く流されて終わった。

翌日からは、念のためということ、エムアールアイとかいう機械装置に頭の中を細かく検査されまくって。

無事退院できたのは、それから二日後のお昼頃だ。

検査結果はまったくの異常なしで、先生には「とても立派な脳だよ」って褒められるくらい。

お蔭でお母さんに、「それなのに算数の点数がよくないのはどうしてかしらね」って皮肉られたけど。

そんなわけで、風邪はすっかり治ったし、何も問題はなかったんだ。

だけど、どうもいまいち調子が出ないというか、頭の中がすっきりしないというか。

結局、計画して合わせていたお父さんとお母さんの休みがずれてしまったこともあり、今年は家族で遊びに出掛けることもないまま、新学期を迎えるに至った。

学校が始まり、生活のリズムが戻ってくると、夏休み中のことなんか振り返る暇もなくなり、あの不思議な出来事のことでも次第に忘れていった。

—— 一年後 ——

ホームに降り立つや否や、ムワツと、むせ返るような鉄くさい熱気に巻かれた。

カン！ カン！ カン！ カン！ カン！ カン！

すぐその踏切が、けたたしく警報音を鳴り散らしている。

眩い陽射しに顔を顰めつつ、改札口に向かって歩き出すと、列車はホイッスルを合図にゆっくりと動き出した。

たった二両編成なのに、随分と重々しい唸り声を上げながら、オレの横をすれ違っていく。

やがて車両が完全に通り過ぎると、線路沿いに並んだヒマワリのすぐ後ろに、深緑の山が広がった。

タタンタタン タタンタタン タタンタタン……

遠ざかる列車の軽快なリズムを背に改札口まで来ると、ようやく踏切の音は鳴り止んだ。

だけど耳が休まる間もなく、吹きさらしの無人駅は、たちまちセミの大合唱に包まれた。

「こつちも暑いなあ」

改札機もなければ駅員さんの姿もない、開放されたアルミ戸。逃げ込むようにその中へ入る。壁際にある木のベンチに一旦リュックを下ろし、

「あー、着いた着いたー」

ぐーっと両腕を上げ、思いっきり伸びをすると、本当の意味で肩の荷が下りた。

だって、乗り過ごしたらヤバいと思うと、ゲームに熱中することも寝入ることもできなくて。

お蔭で、いつもの倍くらい遠く感じられ、正直かなり疲れた。

お婆ちゃんちに遊びに行くのは、我が家にとって毎年夏休み恒例の一大イベントになっている。まずオレとお母さんが一足先に行つて、お父さんは仕事がお盆休みに入ってから遅れてやってくる、というのがいつものパターンだった。

だけど、去年からは状況が変わり、ついにお母さんまでもが『お盆休み組』になってしまった。

うちが共働きになったのは、オレが三年生の時からだ。

隣町でつかいショッピングモールがオープンして、お母さんは、その中のジュエリーショップにパート社員として勤めることになった。

もともと、お父さんと結婚する前にも宝石関係の仕事をしていたらしく、経験を活かすチャンスだとか言つて張り切っていたっけ。

そんな感じで一生懸命やっていたからだろう、去年の春にはめでたく正社員に昇格したというので、三人でお祝いをした。

パート社員と正社員とでは、お給料から何から随分違うらしく、「ボーナスも出るのよ！」つてすごく嬉しそうだったのを覚えている。

でも、その分、今まで以上に頑張らなきゃいけなくなり、以前のように簡単には長い休みが取れなくなつたみたいで。

特にお盆とかお正月のような、みんなが休みになる時期は、希望どおりの休みを取るのが余計に難しいんだと言っていた。

「それにしても、変わんないな」

ホッと一息ついて辺りを見渡せば、懐かしさで顔がほころんでくる。

カーテンが閉まつたままの窓口。煙突が飛び出た古くさいストープ。壁に貼りまくられた時刻表やら何かの案内やら指名手配犯やらの、色褪せたポスター群。

唯一真新しいやつには、いつものカラフルな花火写真と『盆祭り2012』の文字が、ひと際鮮やかに描かれている。

人気のない古い木造の駅舎は、二年前の夏と何も変わらず――

「あれ？」

思わず目を凝らす。

出入り口から向こうの景色に、何か足りない気がしたのだ。

リュックを引つつかみ外に出ると、明らかにあるはずのものが無い。

おかしいなと思いつつ駐車スペースを横切り、そこまで駆け寄ってみる。

駅の道路向かいにあった、駄菓子屋さんっぽい小さなお店。

建物自体はそこにあるのだが、二階部分にでかかと掲げていた、あの『尾上乾物店』の看板

が見当たらないではないか。

軒下に並んでいた自販機もなくなっているし、表口はすっかり雨戸で閉め切られていて、もはや人が住んでいる気配すら感じられない。

「つぶれちゃったのかな」

小さい頃から、ここに遊びに来るたび立ち寄っていたお店。

着いたらまずこのお店でアイスを買って、食べながらお婆ちゃんちまで歩く、というのが楽しみの一つだったのに。

がっくり肩を落としてつつ、食べられないと分かったら余計に喉が渴いてきて。

仕方ないから、駅のトイレ前の自販機まで戻ってジュースでも買おうかと思い、振り返ったら、「ん？」

再び首を傾げたくなった。

駅舎の出入り口の横、それぞれ向かって左側に電話ボックス、右側に郵便ポストが立っているのだが、何か妙な感じがしたのだ。

その違和感の正体も、すぐに分かった。

おぼろげな記憶ながら、ポストが左側で電話ボックスは右側、つまり設置されている位置が逆だったはず。

しかも、ポストはあんな寸胴で筒状のやつじゃなく、細い一本足に四角い箱が載った形だったような気が……

「だめだ、やめとこう」

悪い癖だ。考えてみれば、二年ぶりに訪れたんだから、駅前の様子が以前と変わっていても別に何の不思議もないじゃないか。

そう思い直し、頭をブルブル振って、両方のほっぺたをペチペチ叩く。

周りの状況が、どことなく以前と違うように思えたり、事によってはまるっきり変わってしまった気がしたり、というこの違和感。

去年の夏頃から、度々そんな感覚に見舞われるようになってしまった。

こういうのは、誰しも多少は経験のある感覚らしいんだけど、オレのはちょっと程度が酷くて。

例えば、教頭先生がいつの間にか校長先生になってたり、教室の席順が微妙に入れ替わっているような気がしたり。

もっとあるぞ。近所のコンビニがローソンだと思ったらファミマだったり、友達の住んでるマンションの部屋が三階でなく四階だったりとか。

でも一番の違和感は、『月』という漢字だ。

中の横線が三本で五画の漢字だと思ってたのに、実際には二本しかなくて四画らしいじゃないか。

こればかりは未だに納得いかないけど、恐らくこういうのも病院の先生の言う『記憶障害』なんだろう。

そう。自分の中ではこうだったはずなのに違っている、ということがよくあって、一時は結構悩んだりしていた。

お母さんに言うとき心配するから、お父さんにこっそり打ち明けたら、インターネットでいろいろ調べてくれて、

「病院で言われたとおり、ちょっとした脳の錯覚みたいなものだから大丈夫だよ。ストレスなんかも原因の一つらしいから、あんまり深く考え込んだり、思い詰めたりしないほうがいいぞ」

というアドバイスも受けた。

だから、これまでもずっと、単なる勘違いや思い違いだと自分に言い聞かせてきたし、なるべく気にしないようにしてきたんだ。

だけど、時々どうしようもなく不安になる。

今日ここで抱いた違和感も、あの時に病院の先生が言った『一時的な記憶障害』の症状なのだろうか。

もしもそうだとしたら、いったいいつまで続くんだろう。あれからもう、一年も経つというのに……。

そんなことを思いながら、ちよつと重い足取りでトイレ前の自販機を目指し、駅に戻りかけた時だった。

今や道路を渡る際の儀式みたいなものだろう、車が来ていないかどうかを無意識レベルで、右・左・右と確認したのだが、

「え？」  
リズムにすれば、タン・タン・タ・タン！ というもの凄いい勢いで、オレは更に左を二度見した。

真ん中の白線もなければ車道と歩道の区別もない、線路と並走する細長い横道。

その少し先の、ゆらめき立つ陽炎の中を、今まさに踏切を渡り終えたのであろう一人の少女が、ゆっくりと横切っていく。

「あ、あれって……」

その少女の頭には、見覚えのあるポニーテールが、まるで夢の中の出来事であるかのように、静かに、ぼんやりと揺れていた。

### 3

それは、もはや『違和感』では済まされない光景だった。

あつ気にとられ、身動きどころか、頭を働かせようとすることすらできなかった。

ミ——ンミンミンミンジ——……ミ——ンミンミンミン……

降りしきる蝉時雨の中で、はっと我に返る。

少女の姿が建物の陰で見えなくなって初めて、何も聞こえないほど茫然と立ち尽くしていたことに気が付いた。

幻覚でも見たんだろうか。

もしかして、こういうのを白昼夢って言うんだろうか。

いや、暑いとは言え、ありもしないものを創り出してしまふほど、頭がぼんやりとしていたわ

けじやない。

ましてや、学校の視力検査で両眼ともに一・五のオレが、他の誰かで見間違いをするような距離でもない。

あの俯き加減の横顔。高い位置で束ねられた長めのポニーテール。

あれは紛れもなく、あの時一緒に井戸に落ちた子だ。「アサミ」と呼ばれていた、あの少女そのものだ。

わけもなく、暗闇の向こうから一筋の光が射してくるような、漠然とそんなイメージが頭の中に浮かんだ。

だけど、その光はすぐに遮られた。

オレがああ『アサミ』を見たのは、夢の中だったはずだ。

それなのに、今が幻覚でないとしたら、いったいこの状況をどう捉えればいいのか。

たまたま夢に見た田舎町に、これまた夢の中の少女と瓜二つの子が実際に存在しているなんて、そんな偶然が――

「動くな」

突然、背後からドスのきいた声が聞こえた。

「大人しく手を上げろ」

腰の辺りに、何か尖った感じの硬いものが当たっている。

自分の身に何が起きているのか考える余裕もなく、言うとおりにすると、

「！」

次の瞬間、耐えがたいムズムズした電撃が脇腹に走り、

「うわ、や、やめッ」

脇の下にかけて這うように襲ってくるその執拗なくすぐり攻撃に、オレは身をよじりながら必死の抵抗を試みた。

「つて、このッ！ やめろ！」

いきなりこんなことをするやつは、あいつ以外に考えられない。

振り返れば、ほら思ったとおり日に焼けた顔が指ピストルを構え、ニカッといたずらっぽく歯茎をむき出しにしている。

「宗佑、お前なあ！」

最初の声の感じで何となくそうじゃないかという気はしたものの、まさか出迎えられるとは思わなかった。

「と、燈馬、こんななって、飛び跳ねちゃって、くッ、くくくッ」

オレの反応をまねて身体をのけぞらせながら、腹を抱えて笑ってる。

その顔を見ていたら、オレも堪えきれなくて吹き出してしまった。

「まったく、相変わらずバカだなー」

「て言うか、なにいきなり声変わりしてんの、お前」

「お前もだろ！」

二人してゲラゲラギヤハギヤハ笑い転げまくる。

二年ぶりの再会がどうか以前に、もうおかしくて楽しくて、一気にテンションが上がっちゃまった。

「養田宗佑。年に一度、夏にしか会わないけど、物心がつく前から一緒に遊んでいる幼馴染中の幼馴染。」

『夏休みの友』と言ったら、オレにとつてはあの宿題の勉強ノートじゃなく、この宗佑のことだと言いつけるくらい。

お母さん同士も同級生で仲がよく、生まれた病院も同じで誕生日も一日違いという、ある意味親戚以上に近い存在だ。

「わざわざ迎えに来てくれたのか？ てか、よく分かったな」

「たまたまだよ。ここに向かう途中、お前んとこの婆ちゃんに会ってさ、燈馬がそろそろ着く頃だと言っているから、ちょうどいいやつて」

「あー、そういうこと」

お婆ちゃんに、一人で行くことを電話で伝えた時、駅まで迎えに行こうかと言われたんだけど、大丈夫だから断つといたんだ。

と言うのも、お婆ちゃんちの近くに、『とみやま公園』というわりと大きな目印があった。

そこを目指していけばどうにかなると思っただけ、どうせなら最後まで自力だけで辿り着いてみせるぞって意気込んでいたから。

でも思いがけず、着いてすぐに一番の遊び友達と会えるなんてラッキーだ。

それに、宗佑がちつとも変わってない感じで、ちよつと安心した。

そりゃあ当然前より背は伸びてるし、幾分長めになったスポーツ刈りは毛先を遊ばせたりして、多少チャラくはなってる。

着ているものも、スポーツブランドのロゴ入りTシャツ&短パンじゃなくなり、膝丈のジーンズにブルー系の襟付きチェックシャツを合わせた感じで、なかなかの爽やか少年だ。

だけど六年生にもなれば、周りもみんな結構お洒落に気を遣うようになってきているから、このぐらいの変化は普通だろう。

オレのこのハーフパンツを下げ気味に穿くのだって、だらしないんじゃないかと、一応お洒落の一部なんだよな。お母さんにはえらく不評だけど。

それにしても、わざわざ駅に来るからには、宗佑にも予定があるんだろうと思っ、

「これから、どこかに出掛けるのか？」

何の気なしにそう尋ねたら、

「あー、いや、そういうわけでも、ないんだけどさ」  
「って歯切れの悪い答えが返ってくる。」

「じゃあ、何でここへ？」

「まー何て言うの、待ち合わせ？」

「誰と？」



「えーと……」

頭上の小バエでも目で追ってるみたいにキョロキョロしながら、人差し指でほっぺたをポリポリかいている。

「どうも怪しいなと思ひ始めた矢先、」

「そーすけーくん」

後ろのほうで、キンキンした甲高い声が響いた。

すると宗佑が「おー」ってオレの肩越しに手を挙げたから、何となしに振り返ったんだ。

そしたら、目が覚めるような恰好をした女の人が、手を振り振りこちらに駆けてくるのではないか。

髪はほとんど金髪に近い茶髪。芸能人ばりののでっかいサングラスをかけ、肩から細いひもで吊ってるだけの鮮烈なピンクのひらひらを纏ってる。

しかもあのミニスカート、ヒョウ柄、つてやつ、だよな。

宗佑にお姉ちゃんなんかいないから、えらくド派手な知り合いだな、とか思いつつ、「誰？」という疑問を込め、目で訊いたんだけど、

「ま、そういうこと」

「って、どういうことだよ!？」

なんてツツコミを入れる間もなく、その女の人が横にやって来た。

「ごめんね、まったー?」

「いや、今来たところだから」

「何このいかにもな感じのお決まりっぽいやり取り。」

「これじゃまるで……」

「あー、紹介する。同じクラスのエレナ。で、こっちが幼馴染の燈馬」

「エレナですー、よろしくねー♪」

「あ、どうも……」

「っておい、このショッキングピンク女が同級生ってマジかよ!？」

などと声に出して言えるわけもなく、妙に照れくさくて視線を下げたら、ヒョウ柄から伸びた脚がバレリーナみたいに爪立ちしてる。

随分と背が高く、大人に見えたのは、やたらと踵がぶ厚いこのサンダルのせいだったらしい。

てか、ガチか、ガチデートなのか。宗佑に彼女ができたってことか。

軽くショックを受けながら、二人が何か会話してるのを遠くに聞いていたら、

「なあなあ、燈馬くん言うたなあ」

「不意に呼ばれたから、顔を上げた。」

胸元にかかった長い髪を両手で後ろに振り払うと、エレナは外したサングラスをカチューシャッぽく頭に載せ、

「これからショッピングやねんけど、よかったら一緒にいかへん?」

そうやって、パッチリした大きな目で笑いかけた。

初めて間近で耳にするナマ関西弁に淡い感動を覚えつつ、「いやオレは」と断りかけたら、「言うどくけど、うちら付き合ってるわけちゃうから、氣い遣わんといてな」とすかさず切り返してきた。

「仲はええけど、宗佑くんには、ちゃあんと別に好きな子がおんねんから」

エレナの話によれば宗佑は、別のクラスの『サリカ』という学校でも一番人気の美少女を花火大会に誘ったのだという。

「って、お前、マジで誘ったのか!？」

「あ、あー、まあな……」

再びのシヨックだ。

昔からこの地域では、その花火を見ながら男の人が女の人に告白する風習みたいのがあって。確か、その相手から盆祭りの日にOKの返事をもらうと永遠に結ばれる、とかいう言い伝えだったかな。

とにかく、そういう伝説にみんなが憧れているんだって話を、小さい頃に、お母さんから聞いたことがある。

それで、その花火大会に着ていく服を、今から買いに行くところらしいのだが。

「ほんでなー、どんな恰好したらええか分からん言うしなー、しゃーないから協力したげることになってん」

何てこった。

花火大会に誘う本命がいるほかに、買い物を手伝ってくれるような仲のいい子までいるなんて。どうやら宗佑は、暫く会わないうちに女子と仲良くなる術を身につけたらしい。

オレなんて女子と二人つきりなどで、緊張してまともに喋れないってのに。

「せやから遠慮せんといて、うちらは全然かまへんで。あんたも、そのほうが楽しいやろ?」

「おう、一緒に行こうぜ燈馬」

そうは言われても、やっぱり気が引ける。

それに、早く荷物を置いて落ち着きたくて、

「でもオレ、今着いたばっかだしさ、とりあえずお婆ちゃんちに行かないと、心配されるから」はつきりとお断りしたつもりだった。

ところがエレナは、「ほんなら電話したらええやん」と言っつて、肩から提げている革つぽいポシェットから、さっとケータイを取り出してみせた。

「何番?」

「あー……」

「番号、言うてみて。かけたげる」

戸惑いつつ、促されるまま番号を告げると、エレナは慣れたふう素早く指を動かし、「ほい」とそれを手渡してきた。

オレはいったい何をしているのだろうと、呼び出し音を聞きながら、ちよっと思つた。お婆ちゃんに事の成り行きを説明している間、二人は楽しそうに何かお喋りしていた。

宗佑の名前を出すと、案の定お婆ちゃんは一瞬返事でOKしてくれたんだけど、それは同時にもう逃げられないってことを思い知った瞬間でもあった。

ため息と共にケータイを耳から放し、こめかみから流れる汗を袖で拭いていると、  
「ほんま、暑くてかなんなあ」

ふと、エレナと目が合った。

「こんな日は、無性に海へ行きたくならへん？」

いきなり振ってくるから、「ああ、まあ」って軽く相槌を打ったら、「だったらさ」と宗佑が声色をワントーン上げる。

「買い物なんかやめて、プール行こうぜプール」

「あかんあかん」

エレナは表情も変えず、「あほやなあ、プールはあかんやろ」と団扇がわりに両手で顔を仰いでる。

「泳ぎに行くのなら、別にどっちだって一緒だろ」

「何言うてんの。泳ぎたいわけちゃうねん、海に向かって思いっきり叫びたいねん」

「はあ？」

「暑すぎるんじゃボケー！ って」

ガクツ、と大袈裟に崩れ落ちる宗佑をふんと鼻で笑ったら、エレナがニヒヒヒと八重歯を覗かせつつ、手を差し出してくる。

「お婆さん、どやった？」

「あ、一応大丈夫みたいだけど」

ありがとうってケータイを返すと、エレナは口の端をくいと上げて、再びサングラスをかけた。

「ほな行こかー」

カーテンみたいに波打つショッキングピンクをふわりと翻し、さっさと歩き出す。

苦笑いしながら「行こうぜ」と続く宗佑の腕を引っ掴み、「どこまで行くんだ」と小声で尋ねると、「しまむらだけだ」って。

「あのお、もしかして、こっから歩いて行くの？」

「おう、決まってるんだろ」

「ぐはア、マジかー」

たぶんそうなんだろうなとは思っていたけど、途端にどつと疲れが出た。

だって、しまむらは、ドラッグストアやホームセンターと隣り合った場所にあつたはずだ。

つまり、お婆ちゃんとは正反対の方向で、車でもそれなりの時間がかかるくらいの距離だし、おまけにこの炎天下だし。

きっぱり断っておけばよかったな、などと後悔していたら、もうだいぶ先を歩いていたエレナが、急に立ち止まって振り向いた。

「こらあ、二人とも何しとんねん、はよ歩かな日暮れるでえー！」

こうして着いて早々、思いもよらぬ行動を強いられることになったオレは、ついに波乱の夏休みが幕を開けてしまったかのような、そんなざわついた予感を胸に抱きながら、覚束ない一歩を踏み出したのであった。

4

「なあなあ、燈馬くんて彼女いてるん？」

「いや、いないけど」

「なんでなんでー、絶対もてそうやのに」

「別にもてないよ、全然」

「またまたー、ほんまにー？　ほんならバレンタインの時、下級生の子らから本命チョコもろたりとかは？」

「ないない」

「おかしいなー、特に年下からもてそうな雰囲気やのに。案外自分が知らんところで、ファンク

ラブとかできてるかもしれないでー？」

半ば強引に誘い込まれる形で、なぜか宗佑の買い物に付き合わされるハメになったわけだけど。初めこそ、孤独感にも似た居心地の悪さみたいなものでモヤモヤしていたのだが、次第に気にならなくなっていた。

それはたぶん、このエレナという子が、何かと積極的に話しかけてくれるお蔭だろう。

関西弁だからなのか、この子が独特なのか、話すテンポとか言い草が軽やかで新鮮で、とても同級生の女子と会話してる気がしなくて。

「ほな、クラスに好きな子とかおれへんの？」

「いなくはないけど……付き合うとかそういうのはオレ、苦手だし」

「はーん、さては告って気まずくなるんが怖いんやろ。けど男やったら自分からいかなあかんでー。当たって砕けるや。なっ、宗佑くん？」

「お、おう……」

エレナだけでも十分に賑やかだけど、宗佑を話に引きずり込んでからの掛け合いがまた面白い。「あんなあ、宗佑くんなあ、なんや知らんけど今からもう花火大会、ごっつ緊張してんねやんか」

「まあまあエレナくん、そういう話はまた今度ということで」

「そいでなあ、見てられへんようになってなあ、シヨッピングがてら、こうしてうちがデートの練習相手になってあげてん」

「もしもしエレナさ〜ん、聞こえてますかー」  
「ま、何て言うん、要するにポランティアや」

「ポランティアなのかよ！」  
こんな感じだから、退屈する暇もなく、川沿いの並木道にぶつかる頃にはすっかり打ち解けてしまった。

わいわい騒ぎながら道なりに歩いていくと、道路脇に川の名前が記された青い看板が見えてくる。

『一級河川』と銘打っているだけあって、幅の広いその川には、大きくて長い橋が架けられていた。

そう言えば花火大会の時には、河川敷だけでなく、この橋もたくさん見物人で溢れていたっけ。

橋の上は、駅周辺とは違い、真ん中に白線のある道路が真っ直ぐに伸び、その両側には、ちょうどオレたち三人が並んで歩けるくらいの歩道が設けられている。

話しやすい雰囲気だったこともあり、次から次へと繰り上げられる会話の途中で、オレは思い切って二人に尋ねてみた。

言うまでもなく、同級生の中に『アサミ』という子がいないかどうか、ということを見た。

しかし、

「うちのクラスにアサミちゃんいう子は、いてへんな。一組と三組にもおらんのちゃう？」

「おお。俺も覚えがないぞ」

六学年は三クラスしかないので、ほかのクラスの子でも、だいたい顔と名前が一致するらしいのだが、二人ともその名前には心当たりがないという。

それではと、一つ上や一つ下の子ならばどうか、一応食い下がって見たものの、エレナは学年が違うとまったく分からないと言い、

「さすがに俺だって、せいづら全員の名前は知らねえからなあ」

宗佑も、お手上げのようだった。

「けど、そのアサミって子がどうかしたのか？」

「いや、別にどうもしないんだけどさ」

二人が知らない子だとは言え、まだ完全に望みが絶たれたわけではない。

だけど何だか急に自信がなくなってきた、いよいよ幻覚を見たのではないかという気がしてきた。

既に別の話をし始めたエレナの声を半分聞き流しつつ、ぼーっとしていたら、

「！」

瞬間、目を見張った。

と同時に心臓が、ドクンと大きく脈打った。

橋の向こう側から現れた、俯き加減のその姿

さっきの子が、あのポニーテールが、真っ直ぐこちらへ歩いてくるではないか。

歩道を占領していたことに気付き、会話が弾んでいる二人の後ろへ回ってから、  
「宗佑、おい宗佑！」

オレは小声で、しかし語気を強めて叫んだ。  
慌てたように振り返った二人に、「あの子あの子」と目配せをする。

やがて近付いてきたその顔を、はつきりとオレは見た。

橋のちようど真ん中辺で、あのポニーテールが、オレたちのすぐ横を足早に通り過ぎていく。  
今度こそ、幻覚でも見間違いでもないことを確信したオレは、さっそく宗佑に詰め寄り、

「今の子、誰？ 同級生？ 知ってる子？ 名前は？」

ついつい畳み掛けるように訊いてしまったのだが。

「えーっと、あれは……」

「坂下さんやろ、一組の」

代わりにエレナが、平然とした口調で答える。

「へー、よく知ってるなお前。俺、ちよっと分かんなかった」

「うち、去年転校してきたやろ。学校へ挨拶に行った時、偶然あの子も一緒になつてん。会うた  
んはその一度つきりやけどな。でも、アサミいう名前ちゃうかと思ったと思うわ。確か『ヒナコ』っ  
て呼ばれてたん違ったかな」

「ヒナコ？」

「そうや。坂下ヒナコちゃん、ちゆうことになるな」

すれ違いざま、ほんの一瞬だけ目が合ったんだ。

そしてその目が、「あっ」と言わんばかりに見開いたような気さえした。

でも、それも単なる思い違いだったようだ。

だって、あの子は『アサミ』ではなく、まったくの別人みたいだから。

「そっか……ヒナコっていうんだ、あの子」

「たまらず、ため息をつく」と、

「なんやなんや〜」

エレナがサングラスを下にずらし、いたずらっぽく上目遣いでニヤニヤしている。

「燈馬くんて、ああいうのが好みなん？ ふーん」

「な、何だよ。別にそういうんじゃないし」

それなりにかわいっぽい子ではあるけど、ああいう物憂げで暗い雰囲気なのは苦手だ。  
現にオレが気になつてるクラスの子は、明るくて活発なスポーツ少女だし。

「なんなら、うちが間を取り持ってあげよか〜？」

「いいってばー！」

無性に顔が熱くなつてきて、先に一人で歩き出したなら、

「当たって砕けるだけ、燈馬」

宗佑が後ろから肩を組んできて、いつもの顔でニカッと笑った。

「それでダメだったら、お前もこいつにボランティアしてもらえばいいんじゃないやね？」

ウシシシシと一人でウケてる宗佑に、エレナは特に何も返さず、軽く鼻で笑っただけだった。

しまむらに着くとエレナは、まさに水を得た魚のように、お店の中をヒラヒラ泳ぎ始めた。

本当は『広告の品』に目星をつけていたようなのだが、宗佑に合うサイズが既に売り切れていたらしく、「もつとかつこええ服、絶対に見つけたんねん」と張り切ってる。

当てもなくフラフラしてるオレをたびたび呼びつけては、着せ替え人形と化した宗佑を前に、「これとこれやったら、どっちがええと思っ？」やら、「この色の組み合わせ、別に派手すぎちゃうよなあ？」やら、さんざん意見を求めてくるから大変だった。

最後のほうは疲れちゃって、ちょうど日陰になってる店先の花壇の縁に腰掛けてたら、そのまま寝そうになってしまったよ。

暫くして、宗佑がレジ袋を提げて出て来ると、エレナは自販機からアイスを買って来てくれて、三人で食べながら家路に就いた。

ところが、駅の辺りまで戻って来たら、エレナが突然「どないしょ！」とすつとんきような声を上げるではないか。

何事かと思えば、お母さんに日焼け止めを買ってくるように言われたのを、すっかり忘れていたらしく、「何でもつと早う気付かんかったんやろ……」って頭を抱えている。

結局、ドラッグストアまで引き返すことになったんだけど、さすがにこれ以上『部外者』を連

れ回すのは悪いと思ったのか、宗佑が「後でまた連絡する」と言ってくれて、オレはそこでようやく解放された。やれやれだ。

そんなこんなで二人と別れ、山の上の少し傾いた太陽に顔を顰めつつ、お婆ちゃんちに向かって歩き出した矢先のことだ。

ちょうど踏切に差し掛かったところで、

「ちよつといいかしら」

不意に背後から、透き通ったような、澄んだ声に話し掛けられた。

振り返るとそこには、真つ赤なウエットスーツみたいな服に身を包んだ、高校生か大学生くらいの若いお姉さんが立っていた。

艶々した革つぽい質感のそれが、ブーツらしき尖った足先から手の指先まで、ぴっちり張りついている。

真つ先に思ったのは、名作泥棒アニメ映画に出て来る、セクシーな謎の女盗賊みたいだな、と  
いうことだった。

この暑い最中にこんな恰好をしているのは、きつとああいうでっかいバイクに乗っているから  
に違いない。

それで、たまたま近くを通りすがったオレに、恐らく道でも尋ねようとしているのだろう――  
などと勝手に見当をつけていたのだが。

「あなた、不二代燈馬くんよね」

「えっ、はい。そうですけど……」

なぜにオレの名前を知っているのか不審に思い、ちよつと身構えると、

「別に怪しい者ではないから、安心して」

こちらの胸の内を見透かしたように微笑みながら、格好よく髪をかき上げてる。

肩からふわりとこぼれ落ちたポリウムのある栗色の巻き髪は、凜とした色白の顔を余計に小さく見せた。

大きく開いた胸元には、銀色で楕円状の小さなプレートが、細いネックレスと共にキラリと光っている。

そのプレートの表面には、ちょうど『69』という数字を九〇度回転させたような青く発光する図形が、一センチほど宙に浮かび上がっていた。

どういう仕組みでそう見えるのか、気になって眺めていると、

「最初に言っておくけど、私の姿はあなた以外にもは見えないようになってるの」

謎の女盗賊風お姉さんは、唐突にそう切り出した。

意味が分からず、「どういうこと？」って眉間に力を入れると、

「五次元ホログラムによって、視覚が認識できる範囲を限定しているからよ」

そう言っつて、胸元のペンダントを指先で軽く弾いてみせる。

「私は未来から来たの」

「み、未来から!？」

そのお姉さんいわく、時空統括管理局という組織から極秘任務を命ぜられ、ここへ派遣されたのだという。

詳しいことは教えられないが、この一帯で時空変動が観測され、もつか調査中であると。

「それでね、突然だけど当局の意向で、あなたに調査隊の一員として協力してもらいたいのにわかには信じがたい、突拍子もない話だった。

だけど、信じるとか信じないとか、そんなことは、もはや大して重要な問題ではなかった。

「ねえ、本当に未来から来たの?」

そう。日頃から密かにマンガや映画の主人公みたいな不思議体験を夢見ているオレとしては、これがまさにそうであることを「信じたかった」のだ。

「もしも本当に未来から来たのなら、何か証拠を見せてよ」

「いいわ、見せてあげる」

口元に笑みを浮かべたまま、お姉さんはまるで特撮ヒーローが変身する時みたいに、左腕をグツと胸の前に構えた。

その途端、手首を覆うように、銀色の金属製つばいリストバンドのようなものが現れたではないか。

無機質で冷たそうな表面のいたるところに、小さく発光する数字やアルファベットの羅列が見てとれる。

そして、その一部分に人差し指を軽く触れた瞬間、



立ち読みサンプル  
はここまで

「ぬわッ！」

オレは情けない声と共に、腰を抜かしそうになった。

なんと、お姉さんの後ろにもう一人、謎の女盗賊風お姉さんが現れたのだ。

しかも顔から姿かたち、胸元のペンダントに至るまで、まったく同じときてる。

違うのは、青い服を着ていることぐらいだろうか。

それと、まるでそこだけに霞がかかったみたいに、全身の色が薄い感じがした。

「アヴァタール、つまり分身装置を作動させたの。作業の効率化を図るために開発された未来のプログラムよ。彼女はもう一人の私として独立した機能を持っているわ。作業を手分けしたり、時には相談相手にもなったりする、いわば最強のパートナーといったところね」

「すっげえ、本物だ……」

驚くやら感動するやらで、目を見開いていると、

「私のコードネームは、チヒャロット」と、赤いほうのお姉さんが言った。

「後ろの彼女のことは、ユリカポと呼んで」

「ユリカポです。私はチヒャロットの影のような存在ですが、よろしくね」

青いほうのお姉さんも、にこやかに微笑んでる。

「彼のコードネームは……そうね、トーマスってのはどう？」

チヒャロットの提案に、

「いいですね、とつても親しみやすく呼びやすいネームだわ。決まりですね」と分身のユリカポ

が応じる。

「どうも、オレに口を挟む権利はなさそうだ。

まあ、呼び名はどうでもいいとして。

「でもあの、オレはいつたい何をすればいいの？」

「そうね、トーマスは——」

時空ナントカの調査隊つてことは、もしかしてタイムマシンに乗ったりもできるのかな、などと期待に胸を膨らませているオレに、

「差し当たりあなたの任務は、さつき橋ですれ違った子と仲良くなってもらうことかしら」

さらつと、チヒャロットは言い放った。

「つまり」とユリカポが付け加える。「彼女とお友達になっていただく、ということですよ」

「はあ!？」

「今はまだ、あなたが選ばれし者だということ以外、詳しい事情は言えないの。でも大丈夫。時々アドバイスに現れるから。じゃあ、よろしくね」

こうしてわけが分からぬまま、オレは調査隊の一員になった。